むろみんスポーツ
掲載写真のご購入は
0143・22・5123へ

小笠原・松田組 海星 複V

全道高校テニス選手権

団体男子 海星圧倒

【旭川】全国高校総合体育大会（インターハイ）予選の第61回北海道テニス選手権大会は9日、花咲スポーツ公園テニスコートで団体戦決勝と個人戦が行われた。団体戦男子で初の決勝に進んだ室蘭支部代表の海星学院は、札幌光星（札幌支部）に2－0で勝利し、道内の頂点に立った。個人ではダブルスで小笠原・松田組（海星学院）が初優勝した。（野田篤志）

快勝だった。支部予選を含め1本も落とさず決勝を迎えた海星学院。その強さは変わらず、開始約30分で優勝を決めた。

相手の奇襲にも動じなかった。札幌光星はチームで一番実力があるシングルス1をダブルスに回し、ダブルスとシングルス2の勝利を狙う作戦に打って出た。

シングルス1の小笠原（3年）は「自分との勝負を避けてきた。圧勝して相手にプレッシャーをかけようと思った」。強烈なサーブで主導権を握り、果敢に前に出て6－0のストレート勝ち。

ダブルスの2年生コンビ、池田・松田組も「相手が変わってもやることは一つ」と、平常心で挑んだ。ファーストゲームを落としたが、息の合った連係ですぐに巻き返し、3－3までゲームを進めた。

「自分が鍵になるのは分かっていた」と人一倍燃えたのが、シングルス2を6－1で勝利した桜田（3年）だ。相手は長身から打点の高いサーブを繰り出してきたが、冷静にプレー。「ナダル選手（スペイン）に憧れている」というサウスポーは、得意のフォアハンドで応酬。得点が決まると「カモン！」と気合の声がコートに響いた。

菊地竜平総監督は「まずはほっとした」と一息。「選手たちは苦しい場面でも崩れずによく戦った」とうなずいた。

団体戦をけん引した主将の小笠原は「あくまで通過点。目標は個人戦を合わせた3冠と、全国制覇です」とすぐに気持ちを切り替えた。

【団体決勝シングルス】サービスエースを決める海星学院・小笠原＝花咲スポーツ公園テニスコート

技術、人間力磨く

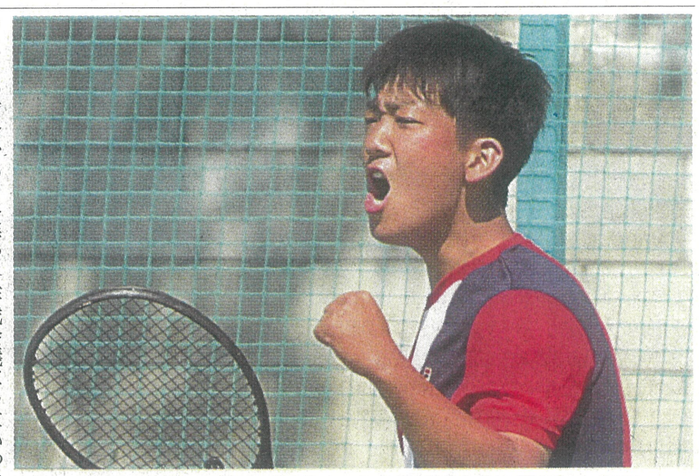
優勝のコールがされると選手たちは笑顔を見せ、タッチを交わして勝利を喜んだ。胆振勢初の全道制覇となり、歴史に名を刻んだ主将の小笠原は「仲間とつかんだ勝利。負けてしまった8日の宿舎での夕食時。菊地総監督は「女子は残念だったが、男子は全てストレートで勝て」とハッパを掛けた。うなずく選手たちの表情は真剣そのものだった。

ダブルスの池田・松田ペアは「やることは変わらない」と、就寝前にひと言交わしただけ。互いを信じ、作戦会議はしなかった。

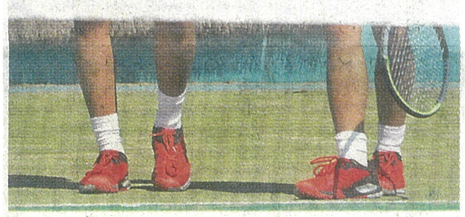
就任6年目の菊地総監督。初めは部員3人からのスタートだった。チームが一番大切にしているのは人間力。「強いだけではだめ。あくまでも教育の一環」として、強くなる中で仲間を思う大切さや、信頼される人間力を養う。

海星学院の魅力は道内に女子や（会場に来られなかったメンバーにもありがとうと伝えたい」と感謝した。

一つの目標だった男女そろってのインターハイ出場は、女子が4強で敗れたためかなわなかった。



【団体決勝シングルス】ポイントを挙げほえる海星学院・桜田＝花咲スポーツ公園テニスコート



【団体決勝ダブルス】息の合ったプレーを見せた海星学院の松田（左）池田ペア＝花咲スポーツ公園テニスコート

も徐々に広まり、現在部員は18人。硬式経験者だけでなく、昨年からは管内の軟式経験者も迎い入れる。

中学時代、硬式道内ランキング1位だった桜田は、昨年春に札幌支部の強豪・立命館慶祥から編入。故障による肘の手術などがあり、「気持ちが切れかかっていた」。このまま終わりたくないと、進路選択で面識のあった菊地総監督に気持ちをぶつけ、転校を決めた。「技術もそうだが、練習に取り組む姿勢や生活態度など、もっと大切なことを学べている」と、充実した表情を浮かべる。

エースの小笠原は道内ランキング1位にまで上り詰めた。チームをまとめる主将は、言葉で伝えることが「苦手」。それでも「自分は勝って仲間を引っ張るしかない」と自覚十分。大会前の休養日、一人校庭を走る姿があった。「正直、重圧はある。少しでも力が付くなら何でもする」と額の汗を拭い、Tシャツは汗で変色していた。

目標の全国一へ、まずは道内の頂点に立った。男子のメンバーは「会場に来られなかったメンバーも含めワンチームです」と、胸を張った。（野田篤志）